日本語を学生と学ぶ
―― 研究から教育への架け橋として ――

添田　建治郎

はじめに

十数年、学生参加型の「双方向形式の授業」を続けてきた。疑問や意見を彼らが質問カードに寄せる。それに一言付けて紹介する。「高校までの『国語』とはちょっと違うなあ」「ほー、日本語にこんな特徴や働きがあったのか！」、そんな表情を見ると授業準備の辛さも吹っ飛ぶ。「日本語は日本人を知る宝の山、日本語あなどるべからず。」が私の思い。彼らの言葉に対する鋭い感性に加え、日本語を磨く習慣がつけば日本の将来も安心だ。そんな思いから『愉快な日本語講座』（小学館 二〇〇五年）を著した。寄せられた意見に突き動かされ、その後の授業風景を描いてみたくなった。括弧で囲ったゴシック字はそれら意見の数々である。

（1）青ジンタン、かごめかごめ

○「青じみ」のことを「青ジンタン」と言いますが、これも「青ジミ→青ジン→青ジンタン」となったのでしょうか。

（人文・Kさん）

Kさんは、打ち身などでの内出血による青あざを言うアオジミから新方言のアオジンタンが出来てくる発想・道筋が、私が前書で説いた、「そうは行かんきん」から「そうはイカのきんたま」が成ったケースと似ていると言っている。

そうは行かんきに→そうは行かんきん（撥音便化）→そうはイカのきん→そうはイカのきんたま

アオジミ（アオジニ）→アオジン（撥音便化）→アオジンタン

青あざのことを、広島県や愛媛県などでは、アオジニやアオジなどと言う。アオジミのミが子音交替（[m]→[n]）してアオジニになる。山口県豊浦郡、愛媛県周桑郡等には、そのニが撥音便化したアオジンも聞かれる。その先にアオジンタンが連想されてくる。

アオジンタンと似た手法で生まれた遊び歌がある。

かごめかごめ　籠の中の鳥は　いついつ出やる
夜あけの晩に　鶴と亀が　つーべった（すーべった）
うしろの正面だあれ

この歌、出だしがカゴメなのはなぜ？カガム（屈）の命令形のカガメを原形に、異化して母音交替（[a]→[o]）したのがカゴメ（新潟、愛媛、香川、熊本各県等）だろう。これは、タタム（畳）がタトム（近

畿、四国地方を中心に富山、三重、広島の各県等）に、シャガムがシャゴム（茨城、石川、奈良、宮崎、鹿児島の各県等）になるのと同じ変化の原理・過程である。カゴメのカゴ音にひっ掛けてその下に「籠（かご）」が続くことになる。

注目はもう一つ、なぜ突然「鶴と亀」が出てくるのか。清元の「月花茲友鳥（山姥）」に、「かごめかごめかごの中の鳥はいついつ出やる夜明の晩につるつるつっぱいた」とある。擬音語「つる」への語呂合わせで鶴が連想され、それとの縁で亀が続いた。現在の歌詞「鶴と亀がすーべった」はその後の変化形ではないかと思う。

（2）つくつく法師

もう一人のKさんが、つくつく法師の二通りの鳴き声を、梶井基次郎の小説『城のある町にて』が観察していると知らせてくれた。

○　梶井は、『城のある町にて』の中でこんな風に書いています。彼はつくつく法師の二通りの鳴き声をちゃんと聴きわけていたということでしょうか。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。…聞いてゐると不思議に興が乗つて來た。「チユクチユクチユク」と始めて「オーシ、チユクチユクを繰返へす、そのうちにそれが「チユクチユク、オーシ」になつたり「オーシ、チユクチユクにもどつたりして、しまひに「スツトコチーヨ」「スツトコチーヨ」になつて「ヂー」と鳴きやんでしまふ。

（人文・Kさん）

梶井は生まれは大阪だが小学生の時に東京に転居。高等小学校と中学校の一時期を鳥羽で過ごし、三年生になって大阪へもどり京都の高校で学んだ。この蟬の声、ツクツクオーシ系に聞く地方がほとんどだが、関東を中心にオーシーツクツク系がある。辞書類の多くはオーシーツクツクと鳴くと記す。その不思議は前書で紹介した。例えば、夏目漱石は、『吾輩は猫である』の中で猫に「どちらの鳴き声が正しいのか」と言わせ面白がっていた。漱石は松山と熊本での居住歴があって両方の聞きなしを知っていたと考える。古形はクツクツホーシ（和名類聚抄）で、音位転倒（クツの部分が前後入れ替わる）によりツクツクオーシ形が出来た。オーシーツクツクは、その後再度転倒してオーシーが前に来た新しい聞きなしである。

（3）小町盛

K先生も前書の「そうはイカのきんたま」や「ご飯の盛り」等の話題でメールを送ってくださった。

○　「そうはイカのきんたま」は、東京で私より半世代から一世代上の人たちが使っていた「恐れ入谷の鬼子母神」、「草加、越谷、千住の先（草加の先は越谷、春日部）」、「とんだところへ北村大善」、「当たり前田のクラッカー」などといった語呂合わせ（地口）より多様で、完成度は上のような気がします。

（理・K教授）

○　弁慶盛、小町盛とくると、桂文楽がよく枕に振っていた「弁慶と小町は馬鹿だなあかかあ」という川柳を思い出してしまうのは、私の品性のなさのなせるわざかな。大盛りが弁慶盛と来れば、ご飯のSSは静盛を提案したいと思います。

（理・K教授）

「そうはイカのきんたま」は、東京の粋（いき）な地口（語呂を合わせた言葉の洒落）に負けず出来映えが良いとお墨付きをいただいた。静盛（しずかもり）のご提案には脱帽である。ご飯のＬＬが弁慶盛なら、ＳＳは**静盛**の方がぴったりだとおっしゃる。拙著を書いていた年度だかその前の年度だったか、ＮＨＫでは大河ドラマに『義経』をやっていた。実は、小町盛を提案した時、学生から、「昔の美人はふっくら太め、小町盛では大盛の意味になりませんか。」との反論が寄せられ、それもまた一理あるなあと思い気がかりになっていた。静御前は華麗に舞う白拍子、ＳＳを静盛と命名すれば、そこから真ん丸太めな女性が連想される心配はないのである。

（4）声・言葉の差

○　携帯にかかってくる非通知や知らない番号の電話には、声が低くなります。見知らぬ相手を警戒して。　（人文・Ｔさん）

○　電話に出る時、私の母親もかなり声が高くなります。子供を叱っている最中に電話がかかって来たとき高音になり、気のせいだか何も無かったように少し笑顔にさえなります。反動が怖いのですが、昔から母親を見ていてあのようには絶対なりたくないと思っていました。気づいたら私も同じようになっていて、弟から「なにその変な声」とよく言われていました。だから一時期地声で電話に出るように心がけていたら、友達に「ごめん今悪かった」とか「声暗いよ」と言われてしまいました。

（人文・Ｔさん）

素性が分からぬ相手には、警戒心から身構え低音で応える、言わば「ウーッ」と威嚇している。母親の発する高音の方は緊張しているせいでオクターブが高くなったのだろう。それにしても、最近の振り込め詐欺や還付金詐欺の報道を聞くにつけ、人の心の弱みにつけこんでその懐を狙うような時代が悲しく情けない。息子、娘たちと電話口での暗証番号や合い言葉を取り決めて防衛するしかないか。

○　女性の中には意図的に高い声を出している人がいます。それは、男性としゃべる時だけ猫なで声を出す「ぶりっ子」という生物です…。そう言えばわたしも時々高い声を出します。それは気分によってなんですが。もしかすると、深層心理で、「かわいく見られたい」という気持ちが働いているのかもしれません。そんな自分のことを「気持ち悪い」と思います。

（人文・Ｉさん）

異性の前で高音になるのは緊張感だけが原因ではないらしい。ある日の「笑点」の三遊亭好楽さんの話には笑ってしまった。嫁入りする娘が感極まって「お父さん、お世話になりました。」と言った。妻もおもむろに「お父さん、お世話になりました。」と続ける。後者の妻の声はかなりの低音だったろう。「家を出る」際の同じお礼の言葉にしても声の質が大違い。家庭崩壊の予感がする。

○　小学生の時、自分のことを「オレ」と言っていました。さっぱりした男の子のイメージにあこがれていたのです。去年、高１の妹も友達同士で「オレ」と言っていたので、「私とか使いんさいや」と注意しましたが、「かわいっ子ぶりっこは嫌だ」と言うのです。

（経済・Ｋさん）

○「言葉の後半を省略する」というセオリーに外れたものをどう感じるか。友達を「ダチ」と呼ぶのは、「友」と呼ぶよりイメージは悪い。でも現代の若者ならではの友情表現で、「友」と綺麗に言うのは恥ずかしいという感情もあります。

（人文・Mさん）

「オレ」だったKさんは今は「私」と言うらしい。Mさんは「友」と言ったのではまだ気恥ずかしいようだ。「遊びし友人（ともびと）いまいずこ」（故郷の廃家）や「なつかしい友の顔が一人一人浮かぶ」（学生時代）などを普通に歌えた時代は、遠い昔になってしまった。

○「ハラへったメシ食いてー」と言う女の子の考えられる状況。

①男友達が多くて常に聞くうち自分も男言葉になった。

②周りの女友達の男言葉を聞くうち自分もうつってしまった。

③「ハラへったメシ食いてー」が常態語化しつつある。

④そこそこかわいくお嬢様と見られがちな子で、そう見られたくなくて、言葉遣いで自分を格下げしようとしている。

特に④。容姿がまあ良く頭も良かったら、言葉づかいを悪くし平均レベルに自分を落として目立たぬようにする。

（人文・Kさん）

良い子になりたくない、目立ちたくない微妙な女心なのだろうか。

（5）祭りだワッショイ

社会人のT氏から次のような質問が寄せられた。

○ お祭りのお囃子や御輿担ぎの時に言う、「ソーレッ」という掛け声。イタリアの友人に、「あれは何と言っているの」「どんな意味なのか」と訊ねられました。「ソーレ」はイタリア語では「太陽」。「ヤーレッ」と合わせ由来を教えて下さい。

（広島・T氏）

お訊ねは、「お祭りでのお囃しや御輿かつぎの時の掛け声の由来は何か」である。ソーレ、ヤーレとも感動詞ではないか。

ソレは人を誘い注意をうながし呼び掛ける時に用いる。ソーレと延ばしたりソレソレと繰り返したりして、その意味が強められる。

頸を伸べて、子息四郎に、「それ打て」とて、大はだ脱ぎになって…

（太平記　巻第十）

「よげになりにたり。ただささすれ。それそれ」とありければ…

（宇治拾遺物語　巻一・六）

ヤレは、ヤ、アレが融合したヤアレを縮めてできた語（ヤは、勢いよく何かをしようとして発する掛け声、歌謡などの囃し言葉）である。ヤーレと長音化させれば強調形になる。左の用例をみるとコレも感動詞である。

ウタヲウタヒイタスハシメニ　カナラスヤトイタセル

（名語記　巻第二）

すけんぞめきは阿波坐の烏、ソリヤサ、かわいかわいもヤアレかうしさき…

（東海道中膝栗毛　五編・追加）

かさねがさねのめでたさをこれから拍子でやってくりよ　やれこれ拍子でたんのむぞい

（浮世風呂　二編巻之下）

感動詞の多くは表情音（アッ、エッ…）から成るが、異なる品詞

から転成したものもある。コレ、ソレ、アレは、元をたどればいずれも指示代名詞である。

表情音からの進化……あー、おー、うん、はー、ひー、やー、わー等々（表情音から出た故、Ah、Oh、Alasなど他国語にも類似のものがある。）

名詞からの転……畜生、くそ、くそったれ（「たれ」は動詞「垂れる」の連用形）

指示代名詞からの転……これ、それ、あれ、どれ

動詞（動詞＋助動詞）からの転……もしもし（しまった）

（松村明編『日本文法大辞典』（明治書院）から要約、加筆）

小倉の祇園祭りの掛け声のヤッサヤレヤレ、あれは何だろう？

やつさ〳〵の空櫓の音も、耳に悲しく遠ざかる

（薩摩歌　下之巻　源五兵衛おまん夢分舟）

ヤレに感動詞のサ（ドッコイサ、イヤサお富等のサ）を続けたのがヤレサである。促音便化してヤッサになる。小倉のこのヤッサは、それで掛け声をかけ勢いをつけて祭りの一体感を味わっている。

○　突然気になりだしました。「おみこしわっしょい」の「わっしょい」は何か意味があるのですか。

（人文・Yさん）

Yさんが言うワッショイ。色々の起源説があるようだが、私は、人が大勢集まり楽しんでいる状態を言うワサが原形ではないかと思う。

Vasauasato元気で、てきぱきとして、楽しげな様子、または、物事をそのようにする仕方　（日葡辞書）

Vassarito騒ぎ立てるさま、または、何事かを祝うさま。（同右）

ワサは大勢で御輿などをかつぐ時の掛け声であり感動詞である。促音を入れて、強調形の、ワッサや右の日葡辞書に見られるようなワッサリができる。

御輿かつぎの掛け声にはソイヤと言うのもある。元の形はソレヤではないかと思う。ソリヤに転じさらにソイヤになる。浅草の三社祭などではこのソイヤを聞く。鹿児島、長崎、佐賀各県その他の方言の「オレ（俺）→オリ→オイ」は、これと同じような母音交替例である。そう言えば、オレドモからは西郷隆盛も言ったオイドンができる。これに関連して左のEさんが言ってきた例は面白い。

○　講義を聞くと、方言の母音交替の多いのに気づかされます。例えば、「これは俺がするからおまえはあれをしろ。」は長崎弁では、

そいはおいがすっけん、わいはあいばせろ

となります。四つとも「れ」→「り」→「い」の変化。言いにくいけど、方言だと流れるようにスラスラ口に出ます。

（人文・Eさん）

中野翠氏は、東京の祭りの掛け声について、最近目立つ右のソイヤの掛け声よりワッショイの方に愛着を感じるらしい。

東京の祭りはワッショイワッショイだ。そいやーなんて掛け声は許せない。

（『サンデー毎日』二〇〇六年八月二〇日－二七日号）

ソイヤのオイ連母音が融合する（[oi]→[eː]）とセーヤになる。一方では、ソリヤからの融合でソリャも出来る。

（6）根掘り葉掘り

○　弟が、「『根掘り葉掘り』の根を掘るのは分かるが葉を掘るのはなぜか」と言っていました。
（人文・Tさん）

学生の弟さんまで授業に参入してきた。『日本国語大辞典　第二版』（小学館）は、根掘り葉掘りの意味を、「①根本から何まで全部。残らず。すっかり。しつこくこまごまと。すみからすみまで徹底的に。しつこく尋ねるさま。うるさく詮索するさまなどにいう。」と説いている。葉掘りは理屈に合わず、また、根掘り～とは言っても葉掘り～とは聞かない。

○　根はいっぱいに広がっています。葉も葉脈が細かく広がっています。で、物事を詳しく聞くことの喩えとして根や葉を思い浮かべて言い換えようとした時に、「葉も上皮をはがせば葉脈が見え易くなる」と思いつき、根掘り葉掘りにしたのでは。
（経済・N君）

N君は葉掘りにも実質的な意味を見出そうとしている。私は、根掘り葉掘りは、根掘り（「何から何まで突き詰めて全部」の意）と言ってその根からすぐに葉が連想され、それに根掘りの「掘り」をそのままなぞったものと考える。これも語呂合わせだろう。不合理な葉掘り表現だが、根掘りに続けることでその意味が強調されている。江戸時代の初め頃から根掘り葉掘り～や根掘り～の用例が見える。

ねぼり葉ぼり芋名月の詠哉　（崑山集　一〇・秋）

一代京へ繋がれて、連添ふことも限りとは、根掘知つての上なれば、如才のあらう筈もなし。　（心中重井筒　中之巻）

根掘り葉掘りという言い方は、島根県出雲地方、広島県高田郡等のネカラハカラや新潟県佐渡、香川県三豊郡のネキリハキリ、また、「根も葉もない」表現などとも通底している。根も葉もないは、大元に当たる根から枝葉末節の葉に至るまで何も無い、つまり、根拠とすべき理由が無いことを強調した表現である。「はをかいてねをたつな」（毛吹草　二）もある。いずれも、葉を枝葉末節、根を大元と考えている。

「けっこう毛だらけ　猫灰だらけ　お前のお尻はくそだらけ」はフーテンの寅さんの口癖だった。川崎洋氏の『日本の遊び歌』（新潮社）にはそういった囃し歌等が数多く挙げられている。語呂合わせの洒落だが、単に結構だ、驚いた、当たり前だと言ってしまうよりも意味が強められている。

おどろ木　桃の木　さんしょうの木　たる木に　ブリキに　陸蒸気
（広島県）

あたりき　しゃりき　うんこのき　しょんべんたれても　うんちっち
（大阪）

学生の、子供の頃にことば遊びをした思い出が次々と寄せられた。

○　「花いちもんめ」で盛り上がってました。「勝って嬉しい花一匁、負けて悔しい花一匁、あの子がほしい、あの子じゃ分からん…相談しましょ、そうしましょ、あばよ、かばよ、ぶーぶーちょんよ、べー」。この「あばよ、かばよ」の部分、「根掘り葉掘り」と似た使い方になっています。
（人文・Kさん）

○　私が幼い頃は、「じゃんけんもってすっちゃんほい　あいこでアメリカヨーロッパ　パリは名高い大都会　インドの国は暑い国

…」と言っていたと思います。今日先生が言われた、同じ「あ」を並べたり、尻取りにしたりしただけのような気がします。

（人文・Sさん）

『日本の遊び歌』には、尻取り風のじゃんけんの歌、「じゃんけんじゃがいもさつまいも（あいこのときは、あいこでアメリカヨーロッパ パイのパイのけんぶつにん ニンニンにくやのおおどろぼう）」（福岡市・太宰府市）が紹介されている。

同書の、「根っきり葉っきりこれっきり かみきりかんきりこれっきり はっきりしゃっきりこれっきり」も面白い。どの地方の言葉遊び歌かは定かでないが、川崎氏は「悪いことや困ったことに見舞われたあとで、もう二度とこんなことがないようにと、思い切る『おまじない』でもあります。」と言う。三回これっきりが見えるが、いずれも、その前にこれっきりとは無縁な根っきり葉っきり、かみきりかんきり、はっきりしゃっきりが置かれる。言いたいのはこれっきりだけ、後は語呂合わせに過ぎない。中で、根っきり葉っきりこれっきりでの根、葉の連鎖は、先の根掘り葉掘りの成立過程を示唆して注目される。

（7）「防人」はなぜ「さきもり」なの？

○「子守」の話を聞いて思い出したのですが、「防人」はなぜ「もり」のところが「人」という字なのでしょうか。上の字の「防」は「さき」と読めるのでしょうか。

（人文・Iさん）

防人（さきもり）は、奈良時代頃（六六四～八二六年）に辺境地域の防備に充当された兵士を言う。東国への勢力の拡大に伴い、新たに日本統治下に組み込まれた地方の壮年の男子（農民）を中心に徴集された。しかも、彼らは、都から見て先にあたる遠い地域、朝鮮半島に対峙する西日本（特に筑紫・壱岐・対馬等）に配置された。

Iさんが言う通り、防人は、防をサキ、人をモリと訓んでいるわけではない。

天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌

（万葉集　巻二十・四三二一　題詞）

佐伎牟理尓（さきむりに）　多々牟佐和伎尓（たたむさわきに）　伊敝能伊牟何（いへのいむが）　奈流弊伎己等乎（なるべきことを）
伊波須伎奴可母（いはずきぬかも）

（同右　巻二十・四三六四）

奥鳥（おきつとり）　鴨云船之（かもといふふねの）　還来者（かへりこば）　也良乃埼守（やらのさきもり）　早告許曽（はやくつげこそ）

（同右　巻十六・三八六六）

防人とはつまり埼守（さきもり）のことである。都から遠く離れた辺境の地域（先（さき）、崎）を守る兵士を言う。同じように「守（もり）る対象＋守」と書かれた例として、県守、石守、門守、島守、関守、玉守、津守、時守、殿守（主殿）、野守、墓守、夷守、道守、山守、渡守等々がある。玉主、山主、渡子などとも記される。

山主者（やまもりは）　蓋雖（けだしありとも）　有（ゆ）　吾妹子之（わぎもこが）　将（ゆひけむしめを）　結標乎（ゆひけむしめを）　人将（ひとかめや）　解（とか）　八方（やも）

（観智院本類聚名義抄　法下二〇ウ）

（同右　巻三・四〇二）

主　…マホル…

渡子　…和太利毛利今案俗云和太之毛利

（真福寺本和名類聚抄　巻一・一八ウ）

主字は、古辞書などにマホルとの記載があることから守と同様にモリと訓める。渡子は川などの渡しの仕事をする人の意で、渡守に同じである。子は或る職業に従事する人を言い、例えば、楫子（かこ）、水（か）

子は船乗り・船頭・水夫などを指している。カコは今も熊本方言に残る。中部、近畿・中国地方で言うテゴも手子であり、手伝いをする人の意である。

万葉集などでは、辺境の防衛の任にあたる人を言うサキモリは防人と書かれることが多い。このような、組み合わせた防・人二字の仮名で以て全体の意味を汲み取って行う訓み当てを義訓と言う。海人、礒人、海女、海子、海部を魚介類を獲るアマに訓ませる類である。若月もミカヅキ、月西渡もツキカタブキヌに訓まれる。

然之海人者 軍布苅塩焼 無暇 髪梳乃小櫛 取毛不見久尓

（万葉集　巻三・二七八）

○ 防人を「さきもり」と読む。これ、誰もが一度は戸惑ったことがあると思います。でも、その時感じた「なぜ？」という気持ちをなかったことにして、こう読むんだとただ暗記してきました。そんな疑問を掘り起こして考えるのが大学の勉強なんだと思いました。（人文・Oさん）

○ 大学は解答を教えるところではない。解答を導き出す方法論を学ぶところですね。（経済・Eさん）

そう、そこにこそ大学で学ぶ意味・意義がある。

余談になるが、学生時代、山口大学文理学部文学科国文学研究室の教官は、関守教授と関講師のお二人だった。関守教授の口癖は「僕は関君を守る関守だよ。」だった。

（8）混交現象もいろいろ

混交現象（言葉の混ざり合い）は、人の、言葉に対するうっかりとした心理が働いて起きてくる。

空模様が怪しい、「雨が降らない前に帰りましょう」と言うのを聞くと、アラッと思う。

雨が降らないうちに帰ろう×雨が降る前に帰ろう

×印の前後の表現、上の「雨が降らないうちに帰ろう」と、下の「雨が降る前に帰ろう」、それらよく似た二つの言い方が意識され、表現の流れに沿って前者の前半と後者の後半の要素がつい混ざってしまう。島崎藤村の『夜明け前』を読むと、「こんな事件の起こらない前に、…」（第二部）他、この手の混交が目立って多い。正法眼蔵の溪声山色の「父母未生以前にあたりて」（父も母もいまだ生まれる以前）や、中国の晉書・巻二十 志第十 禮中の「若亡在昌未生之前者、則昌不應復服。」などもこれらと同類である。お座敷小唄という流行歌の一節、「♪富士の高嶺に降る雪も 京都先斗町に降る雪も 雪に変りはないじゃなし 解けて流れりゃ皆同じ」も、「雪に変わりはない」と「雪に変わりがあるじゃなし」の傍線部同士が混交している。

○ 私は「すごい」の意味で「ばり」って使いますが、「ぶち」が原形、「ぶり」は比較級で、「ばち」が一番強い最上級です。（人文・Yさん）

○ 山口では、「すごく」のレベルが、ぶち、ぶり、ばち、ばりの順で上がっていくと友人が言っていました。「ぶちうまい＜ばちうまい」ですね。（経済・U君）

○ 山口では「ぶり」って言います。「ぶり暑い」とか。私の中での最上級は「ぶりくそ」です。（理・Kさん）

○ 友だちがよく「まぶりくそ」という言葉を使います。聞くと、

山口弁で「ぶち」を強調した言葉らしいのですが、その人以外の県民が使っているのを聞いたことはありません。

（理・Y君）

山口、広島などには強調の副詞にブチというのがある。山口県の場合、現在七十歳代半ばの方は、「ブチは、自分が中学生だった六十年くらい前頃から広がってきた」と言われる。そのブチにバリ（九州や関西に多そう）が被さってブリが生まれ、逆に、新入りのバリにブチが被さるとバチが出来てくる。先のブリで物足りなくなるとブリクソ、さらに強調したくなってマブリクソまであらわれる。強調表現が多様になるはずである。学生のカード、細かく言えば、初出時期、年代差、地域差などは諸氏の研究結果と必ずしも一致しないかもしれないが、それなりの学生の内省として面白く読んだ。

ブチ×バリ→ブリ／バリ×ブチ→バチ

混交は方言同士でも起きる。山口県にも「中指」を言うナカタカユビがある。ナカユビは県北部を中心にほぼ全県的に言い、タカタカユビは中央部と西部に多く、東部に問題のナカタカユビがある。それらナカユビとタカタカユビが接触、前者の前半と後者の後半の要素が順に混ざりナカタカユビができる。これによれば、現存はしないものの、県東部には、その昔タカタカユビ形があったと推定される。タカタカユビは、関東から西に広く分布していた優勢な俗語だったようで、昭和七年の『小学國語讀本』にも「高高ユビ」として載っている。

ナカユビ×タカタカユビ→ナカタカユビ

（9）上代にも混交現象が？

意識の混線は文字を記す際にも起きる。前後に位置する似た文字が意識されてつい誤記される。

左は五世紀後半と推定される有名な鉄剣の銘文である。まず文字を墨書きし彫鏨で線刻する。注目は太線部の其児多加利足尼である。その直前の細線部（上祖名）と後に続く同じ細線部（其児名）の記述から見て、当該太線部の其児の下にも名の字がありたいところだが、名の字の三画目までの夕は、続く人名（タカリノスクネ）の冒頭の万葉仮名の多字の三画目まで（夕部の夕）と、その字形がそっくりである。そのため誤って名の字をとばして多の字を彫り、あるべき其児名…が其児多…になってしまった。

（表）

辛亥年七月中記　乎獲居臣　上祖名意冨比垝　其児多加利足尼
其児名弓已加利獲居　其児名多加披次獲居　其児名多沙鬼獲居
其児名半弖比

（裏）

其児名加差披余　其児名乎獲居臣　世々為杖刀人首　奉事来至今
獲加多支鹵大王寺　在斯鬼宮時　吾左治天下　令作此百練利刀　記
吾奉事根原也

（稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文）

さて、左掲の万葉集巻四・五一〇番歌の第二句目ははたして混交の所産だろうか。

臣女乃　匣尓乗有　鏡成　見津乃濱邊尓　狭丹頬相　紐解不離　吾
妹兒尓　戀乍居者　明晩乃　旦霧隠　鳴多頭乃　哭耳之所哭　吾
戀流　千重乃一隔母　名草漏　情毛有哉跡　家當　吾立見者　青旗
乃　葛木山尓　多奈引流　白雲隠　天佐我留　夷乃國邊尓　直向　淡

路乎過　粟嶋乎　背尓見管　朝名寸二　水手之音喚　暮名寸二　梶之聲為乍　浪上乎　五十行左具久美　磐間乎　射往廻　稲日都麻　浦箕乎過而　鳥自物　魚津左比去者　家乃嶋　荒磯之宇倍尓　打靡　四時二生有　莫告我　奈騰可聞妹尓　不レ告来二計謀

（万葉集　巻四・五〇九）

白細乃　袖解更而　還来武　月日數而　往而来猨尾

（同右　巻四・五一〇）

万葉集の中では、指し交ふのは袖（巻四・四八一番）であり、解き交ふのは紐や帯である（証例はいずれも後掲）。従って、右に挙げた五一〇番歌の第二句目（波線部）は、袖の本文記述が正しければ、袖指し交ふとあるべきで、かように袖解き交ふと詠われているのは解せない。ここのところ、近年になって、新編日本古典文学全集の小島憲之他校注・訳の『万葉集』が当該歌の頭注で「同じ内容を表しながら表現が異なる『袖かへし』と『紐解き交し』などとが混線して生れた表現か。」と記し、伊藤博氏の萬葉集釋注も「『袖かはし紐解きて』の混交した表現か。」と説くなど、混交の所産という解釈が出されている。

白細乃　袖指可倍弖　靡寐　吾黒髪乃　真白髪尓　成極…

（同右　巻三・四八一）

古昔　有家武人之　倭文幡乃　帯解替而　廬屋立　妻問為家武…

（同右　巻三・四三一）

狛錦　紐解易之　天人乃　妻問夕叙　吾裳将レ偲

（同右　巻十・二〇九〇）

更　…カヘル…カフ（上平）カハル　カハル〳〵…

（観智院本類聚名義抄　僧中二八オ）

易　カフ（上×）　カハル…カハル〳〵…（同右　佛中四六ウ）

筆者は、右に掲げた袖指し交へてと帯解き交へて（いずれも同じ巻三）の間での混交との見方も捨てがたくは思うが、それよりも単純に、紐解更而（紐解き交へて）を袖解更而に写し間違えたものと考えたい。直前の、五〇九番歌の本文に紐解不離とある故、その反歌に当たる五一〇番歌の第二句目は紐解更而だった、その紐字の偏や旁全体が袖字に似ている故、誤って袖解更而に写してしまったと。紐解き交へた例は、現に右掲の巻十・二〇九〇番歌に紐解き交はしと詠まれた例が見えている。

これに対する越智裕二氏の提案は、同じ誤写説ながら私には思いがけないものであった。十分に一考の価値があると思う。

○　万葉集の編者が、混交して誤って詠まれたような歌を採るだろうか。反歌である五一〇番歌の当該部分は、実は袖触更而だったのに、写す段階になって、直前の五〇九番歌の本文中にある表現、紐解不離に引かれて、元は袖触更而だったその触字を解字に誤ったという見方です。触と解は扁が同じです。五一〇番歌、五〇九番歌、二首の当該部分の歌意も似ています。

（東アジア院・O君）

彼の説が大変面白いと思うのは、実際に巻一七・三九九三番歌に蘇泥布理可邊之（袖振り更へし）とあったり、巻七・一三九二番歌の袖耳触而の触字なども「ふる（振）」と訓めたりしそうなことである。ならば、当該箇所の元々の本文は袖触更而で、訓も「袖振りかへて」だったとなろう。同じ誤写説ながら、越智説は触字を解字へ誤写したものとみている。

（10）方言と全国共通語の間でも混交が…

混交現象は、当該地方で使われている方言と新たに伝播して来た全国共通語の間でも起き得る。多くの西日本方言域では「充足していない」ことは足ランが本来の言い方だが、全国共通語の足リナイも使われるようになった。そうするうちに、足ランとその広がってきた足リナイが接触し、左掲の二通りの混交によって足ラナイと足リンが生まれた。その結果、今では、足ラン、足リナイに、足ラナイ、足リンを加えた四種類の言い方を併用している。

足ラン×足リナイ→足ラナイ／足リナイ×足ラン→足リン

西日本方言域に多い接続詞（接続助詞）のジャケーと全国共通語のダカラとが接触して二種類の混ざり合いを起こし、当該域の若い世代は新たにジャカラやダケーも口にするようになった。

ジャケー×ダカラ→ジャカラ／ダカラ×ジャケー→ダケー

もう一つ若者言葉にゴメンケドがある。これも、ゴメンナサイ×ワルイケド（スマンケド）の混交によるものだと思う。左掲の長崎県出身のH君が言うゴメンバッテンが、その見方を裏付ける良い証拠になるのではないか。

○　出身は長崎県。「ごめんばってん」と言います。「ごめんなさい×悪かばってん」の混ざり合いですか。（経済・H君）

○　私は「ごめん×すまんけど→ごめんけど」ではないかと思います。つまり、「すまん」のところを「ごめん」に入れ替えたという変化です。どうでしょう？（人文・Iさん）

これに対してIさんは、スマンケドのスマンの部分をゴメンに置き換えただけだと言う。その見方が正しければ、先のH君のゴメンバッテンも、悪カバッテンの悪カの部分を単にゴメンに置き換えて成ったということになる。「全然良クナイ」を「全然悪イ」に言う類である。どちらも可能性がありそうに思う。

（11）混交現象がいっぱい

○　中学生の頃、友達が「チリッシュ持っとらん？」と言っていて、変なことばと思っていたのですが、もしやそれは、先生の言うコンタミネーション（混交）で、日本語の「ちり紙」と英語の「テイッシュ」が混ざったのではないでしょうか。（人文・Kさん）

○　先生、私も混交現象を発見しましたよ！それはある雑誌を読んでいる時、目についた言葉なのですが、「懐が深い」と「心が広い」が混ざったと思われる「懐が広い」なんて言葉を見つけました。思わず「混交現象だっ！」と叫んでいました。（教育・Kさん）

○　アナウンサーも、時間の「十分（ジップン）」をジュップンと言っています。結構皆ジュップンが正しいと思っています。十時のジュウと十分（じっぷん）のップンが混ざった「ジュップン」ですか。（農・Nさん）

○　私は、昨年から、土曜日の生涯学習授業の「奥の細道を読む」を受講していますが、講師の先生は藤原ノリ子先生だと思っておりました。つまり、藤原紀香（のりか）＋藤原マリ子→藤原ノリ子となったわけです。これも混淆現象でしょうか。（社会人・Sさん）

みんな鋭く観察している。開放講義に出ていた社会人Sさんの話、

藤原マリ子先生にお伝えすると、にっこり一言「光栄です、よろしくとお伝えください」とおっしゃっていた。

○　私の母は湯布院出身なのですが、たまに「由布院」と書いてあるものを目にします。近くに由布岳があるので、「由布岳×湯布院→由布院」となったのでしょうか。　（医・Sさん）

事実は、昭和三十年に湯平村と由布院町が合併して湯布院町となったものらしい。JRの駅名は由布院（旧由布院町にあったからか）だった、町は平成の大合併でその後由布市になったそうだ。

妹と私だけだろうか、『夏の思い出』の歌の一節を「しゃなこつぶれば～」と歌っていた。一番の歌詞の「しゃくなげいろに」と二番の「まなこつぶれば」を混交させていたのである。

(12)「おひめさん」と「いぬのくそ」

○　熊本県の友人は、「ものもらい」をオヒメサンと言います。よく聞いてみると、上まぶたに出来たものをオトノサン、下まぶたのものをオヒメサンと言い分けるそうです。（人文・Tさん）

麦粒腫である。Tさんによれば、熊本県の友人は、その腫れ物の出来る場所の違いで二通りに言い分けると言う。事実ならこれは意味分担の例になる。一方、治るための呪（まじな）いに、広島県央では「ワラシビ（藁の芯）で輪を作って結び取る恰好をし、それをいろりで焼く」と聞いた。

モノモライの呪いには、「木櫛の背で畳をこすって患部へ当てる」「男の末の子に障子の穴からむすびを貰って食べる」「井戸に篩（ふるい）を半分見せて治ったら全部見せるという」（長野県松代町柴）のように同一地点で異なる複数の呪いを行う例が幾つかあり、…　（『日本民俗大辞典』（吉川弘文館））

麦粒腫の東日本方言域に多いモノモライの由来は、他人から物をもらって歩くとこの病気が治るという昔からの言い伝えから来ている。麦粒腫の方言の全国分布図を見ると、中国地方と秋田県に目立つメボイト系、中部地方や近畿の一部のメコジキ系、熊本県天草のメカンジン系、いずれも、「人にせびって物をもらうとこの病気が治る」といった発想（伝承）から生まれた方言形である。ホイト（賠堂）もカンジン（勧進）（出家姿で物をもらって歩くこと）も、乞食を言う漢語である。一方で、近畿や四国、広島県南部、山口県等に目立つのがメイボ系。目の疣（いぼ）。メーボ、メンボ、メボはそれの訛りや短縮形である。こちらは、モノモライを含むメボイト系との命名の視点の違いが大きい。もう一つ、語源ははっきりしないが、近畿地方や岡山県域にはメバチコが聞かれる。

九州の西部地方（熊本県など）に多いオヒメサンは、それらとはまた一風変わった名付け方。オヒメサンと言うかと思えば、その隣の地方ではイヌノクソとも言っている。遠く山形県東部・岩手県南部・宮城県等ではバカと呼ばれる。そんな中で、とても綺麗とは言えない麦粒腫をなぜ上品にオヒメサンと言うのだろう。

九州西部地方に多いオヒメサンを、『お国ことばを知る方言の地図帳』（小学館）は「インノクソを逆方向に言い替えた（美化した）もの」と説く。綺麗にオヒメサンと命名し直し、そのことばの力を借り「目にできた汚い腫れものやただれを治してしまおう」とする言霊信仰。口にすることで敬して遠ざけ汚れから逃れようとする。

◎インノクソ系は熊本県を含む九州の西部と南部の一部に広がる。

◎オヒメサン系は分布域がインノクソのそれよりやや狭く、熊本県、福岡県南部、宮崎県西南部、鹿児島県東北部に目立つ。

汚いと綺麗、対照的なインノクソとオヒメサンだが、二つの方言形は隣り合った地方で聞かれたりする。そのことが、インノクソは汚いタブーのことばを敢えて選んだひねりによる命名、オヒメサンはそのインノクソを美化し汚さをぬぐい去ろうとした言い替え、という見方を裏付ける。インノクソと決めつける地方だからこそ、オヒメサンと上品に言い換えた方が治りやすいと考えることもあったか。オヒメサンの分布域の方が狭いのも肯かれる。

（13）亀虫もおひめさん

○　私は兵庫県の出身ですが、幼い頃、ヘコキムシのことを「おひめ」と言う人がいました。行商をしていた人で、どこの人かは分かりません。不思議な言い方だと感じていました。

（人文・Ｉさん）

○　かめむしって「ホウムシ」とも言います。芳虫、あれは、あの独特の臭いから来ているのですか。家から追い出す時には、「姫さん、姫さん…」と言って紙に乗せて外に捨てます。クサイ臭いを出さないようわざと逆に言っているんですね。

（人文・Ａさん）

○　私は「ホウムシ」と昔から呼んでいました。もっと小さい頃は「ジャコウムシ」でした。地域でも言う人は少なかったのですが、そのうち、カメムシと言うようになりました。どこからその呼び方がやってきたのか分からなかったです。

（人文・Ｗさん）

○　かめむしは、私の出身地の松江の西側の出雲地方では「おじょろさん」と言います。

（教育・Ｓさん）

学生は、麦粒腫（ものもらい）の方言のオヒメサンからくさい臭いを出すかめむしを思い出している。かめむしは新潟県中頸城郡等でもオヒメサンと呼ばれる。ホウムシは芳虫かな。麝香鹿の下腹部の香嚢から採った芳香の強いものが麝香だという、それがジャコウムシの名の由来になったと考える。

○　私の父は、カメムシのことをはっとうじと言います。しかも、家の中でカメムシを見つけ、取って外に出そうとするとき、「えーにょぼ、えーにょぼ」と言います。

（人文・Ｈさん）

なぜ、かめむしのことを（オ）ヒメサンやエー女房と言うのだろう。島根県出雲地方や長野・新潟・兵庫・群馬の各県ではオジョロサン系にも言っている。かめむしのくさい臭（にお）いや汚さから逃れるため詔（の）り直された（言葉が呪術的に働くことを期待し、あえて逆方向に言い変えた）ものではないか。嫌なイメージを敬して遠ざける。言霊信仰に基づく詔（の）り直しの用法は、古事記の時代からその例があるようだ。

天照大御神者、登賀米受而告、如レ屎、酔而吐散登許曾、我那勢之命、為二如此一。

（古事記　上巻・一八ウ）

近年は、右の一節、「糞として認めないと言葉に出すことによって、けがれを回避することができる」とする説が有力だと聞く。

○　カメムシのことを「姫さん」と言うのは、食べ方が汚い時にお婆ちゃんなどが、「まあ、上品に食べてからに！」と逆に言って、「良くないよ」と注意するあの発想と一緒ですか？

（人文・Mさん）

○　私が両手に何か荷物を持ち、手が使えない状態でふすまなどの引き戸を足で開けようとする時、祖母は「ちょっと小笠原流！」と言います。行儀に気を遣う祖母が舌を出してそれを言う姿は、「おちゃめでいいなあ」と思います。　（教育・Kさん）

○　部屋が片付いていないのに「きれいな部屋ね」、お金がない時も「大金持ちだから」と逆に言ってしまったり。そうでない女性を「べっぴんじゃ」「ええ女房じゃ」と言うのはどうですか。

（放送大学・Tさん）

右の他、切れない包丁を「よう切れる包丁だ」と皮肉る、まくし立てる相手に、「分かりやすく話しなさい」の気持ちを込め謙遜めいて「私は頭が悪いもんで…」と言う。発想は、麦粒腫をきれいにオヒメサンと言うのに似ているが、搦め手からたしなめて効果満点である。

一方、梨を「有りの実」と言い、するめを「あたりめ」、すり鉢を「あたり鉢」などとするのは忌み詞（ことば）である。「死」という響きを嫌った四（よん）、悪しを嫌った葦（よし）も同様である。イメージを良い方へ変えたいという気持ちを持つのはだれもみな同じようだ。

（14）はちりはん

○　自分は長崎出身です。祖父母はサツマイモのことを「はちり」と言います。

（教育・H君）

薩摩芋は、江戸時代、京阪ではハチリハン（肥前ではトウイモ、カライモの他ハチリとも）、或いはジューサンリと言われていた。前者は「焼き芋が栗（九里）の味に似ているが少し劣る」との、後者は「薩摩芋は栗（九里）より（四里）も美味しい」との発想による命名のようだ。これに関連して、江戸時代末期の随筆、守貞謾稿第一巻巻之五の生業の「薩摩芋ノ看板行燈」の項の、「京坂ニテ、薩摩芋焼キ、或ハ、蒸賣ル小戸ノ業也。其行燈ニ、八里半ト書ル者多シ。是ハ蒸栗ノ味ニ似テ、僅カニ劣ノナゾ也。…因云、京坂ニテ、是ニ十三里ト書ルアリシ。栗ヨリ味キノ謎也。従レ栗九里四里和訓近シ。」の記述が面白い。江戸から十三里くらい離れた川越（かわごえ）あたりが薩摩芋の主産地だったからジューサンリ、との説もある。

甘藷…トウイモ肥前カライモ　ハチリ俱ニ同上

（重訂本本草綱目啓蒙　第二）

おいか「…いづかたも焼芋のないことはございません

おたこ「さやうございますとさ。私も初は何の事を申すかと存たらば、八里半とは九里に近いと申すことだと

おいか「さやうさ。最ちつとで栗だといふ事ださうにございます。おまへさんはどうか存ませぬが、私どもは栗よりおいしうございます…

（浮世風呂　三編巻之下）

○　休みに長崎に帰った時、祖母に、イモのことはハチリと言うらしいよと話したら、「知っとるよ。でも、うちは『はっちゃん』って言いよるばい」と言っていました。愛嬌があるという理由で島原の人は〝はっちゃん〟と呼んでいたそうです。

（医・Ｙさん）

長崎県（長崎市一部、諫早市、北高来郡等）などではハチリ、ハチンと言い、Ｙさんは愛嬌を込めたハッチャンもあると言う。愛嬌というのははたしてどうだろうか？

（15）方言がにじみ出る

○　今日の講義で、親はこどもに共通語を話してほしいのではないかという意見を聞き、私も母から方言を注意されたことを思い出しました。ただ、私の母の場合は、「～だよ」という意味の「～ばい」という方言は、汚い、女性は使うものじゃないと考えたらしく、兄には注意せず、私だけに注意していました。しかし、今でも印象的に覚えているのですが、母自身「ばいとかいわんばい！」と言うのです。従って当然、私は今も「～ばい」と使っています。

（人文・Ｆさん）

○　福岡県筑後地方出身の妻が、娘の使う山口弁の「言わんそ」が気になるらしく、「言わんそなんて言わんと」と注意するのです。筑後では同じ文末詞は「と」ですよね。（人文・Ｎ教授）

○　先日暖簾の絵が描かれたトラックを見かけました。一瞬、暖簾を配送しているのかと思いましたが、その暖簾の絵の左側には「飲んだら」、下側には「のれん」と書かれていました。つまり、「飲んだら乗れん」、飲酒運転はしませんよという宣言だったのです。「乗れない」という否定を「乗れん」とするのは西日本なので、あのトラックは少なくとも西日本のどこからか出発したのだなあと思いました。東日本に配送に出かけたら、せっかくの宣言もピンと来てもらえないでしょうね。（人文・Ｔさん）

右は、被調査者が思わず「言ワンなんか言ワン」と答え、それで以て、当該地方では打ち消しの助動詞にンを使うことが分かる、それに類した話である。人文・Ｓさんは、大分県の飲み屋さんなどに同じ文面のポスターが貼ってあると教えてくれた。Ｔさんの話に関連して言えば、西日本方言域では高速道路の看板によく「ここから出よ」とある。東アジア研究科のＳさんは、山口市だか、ＪＲの踏切遮断機のない所に「止まれ、見よ」と書かれていたと教えてくれた。

（16）認識を新たに

○　高等学校の授業では、「うるはし」と書かれていても「うるわし」と音読するようにと記憶させられました、どうしてそうなのかは教えてくれず、そのうち機械的にそう覚えました。

（人文・Ｋさん）

総じて、語頭は強く発音され語中語尾ではそれが弱まる。平安時代のハ行は「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」と発音されていた。同じ発音位置の有声音で語中語尾にあって発音の弱まったのが、「ワヰウヱヲ」である。手のひらの前で発音した時に「ワ…」の方が「ファ

…」より息のかかり方が弱いことで、なるほどそうかと分かる。例えば、うるはしで言えば、「は」の「ファ」音が語中で発音が弱まり「ワ」になったのである。理由が分かると、な～んだという感じ。

○　同音衝突の回避という話で思い出しました。小学校のとき、同じクラスに足立君と安達君がいて、「あしだち君」と「あんだち君」で呼び分けていました。（経済・S君）

目のつけどころが良いなあ。そうか、島根県の「足立美術館」（安来市）を「あしだちびじゅつかん」、「石見安達美術館」（浜田市）を「あんだちびじゅつかん」と言って区別する手もあったのである。確かに、同音衝突を避けた例は多い。すぐ思いつくだけでも、「化学（ばけがく）」と「科学（かがく）」、「私立（わたくしりつ）」と「市立（いちりつ）」、「基準（もとじゅん）」と「規準（のりじゅん）」、山口県でも「萩高（はぎたか）（萩高校）」と「萩工（はぎこう）（萩工業高校）」で言い分ける。

○　抜歯も抜糸も「ばっし」と読みます。或る歯医者さんは、同音衝突を避け抜糸は「ばついと」と言っていました。（理・H君）

右の同音衝突の回避の話題に触発されたかして、我も我もと質問カードが寄せられた。音位転倒について言ってきた話が面白い。

○　音位転倒の話ですが、私が小学生ぐらいのとき、回転寿司屋で四十歳くらいのおじさんが、マツブ貝を大きな声で「マブツ貝一つ！」と注文してしまいました。そこの寿司屋は、お客から注文があると、店員さんが大声で注文の品を復唱しなければならないことになっているらしく、注文を受けた店員さんが困っていました。店員さんに「マツブ貝ですね」と確認され、そのおじさんは耳まで真っ赤になって小さくなっていました。（人文・S君）

○　授業参観の日、緊張で「海のもくず」を「海のもずく」とひっくり返っていた先生がいました。（教育・A君）

店員さんも「マブツ貝一丁！」と復唱するのは気が引けたかな。話題を転じて、学生が言ってきたちょっと綺麗な話である。

○　「おまる」というのがありますけど、どうして「まる」になるのでしょう。「お」は丁寧に言うための「お」ですよね。排泄に関しては「おならをひる」などの「ひる」と言う方言が多い気がしますが、所によっては「まる」と言うのでしょうか。（教育・U君）

U君の話、私も昔、荷馬車を引いていた馬が道の真ん中でもよおすのを見て、「アッ、馬が小便バッタ！」と言っていたことを思い出す。バルとマルはバ行音とマ行音の相通現象、その所産である。オマルはそれの名詞形である。女房詞か。赤ん坊に排泄をさせるあの道具、だれもが生まれてすぐお世話になった。古く古事記や竹取物語にもクソマル、ユバリマルと出てくる。おしっこは温かくまさに「湯」であり、ユバリマルはそれを放出することを言う。日本書紀私記（御巫本）神代上にも「小便 由波里万留」と見える。

亦、其、於下聞二看大嘗一之殿上屎麻理散。（古事記　上・十八ウ）

御手を広げたまへるに、燕（つばくらめ）のまり置ける古糞を握りたまへるなりけり。（竹取物語　石上の中納言と燕の子安貝）

旋　ユバリマル（観智院本類聚名義抄　僧中一六オ）

次は小学生だった頃の思い出話である。

> ○「帰ろうよ」を言う方言の「いのう」について先生がおっしゃっていましたが、小学校の礼儀作法を書いてある冊子に、普段使ってはいけない言葉として「いのう」が入っていました。そして、さらに、「帰るときの『○○ちゃんいのうや』はいけません。「○○さん帰りましょう」とありました。古い冊子で、昭和時代のものだったかもしれまん。
>
> （教育・Aさん）

Aさんが見たのは母校の小学校で作られた冊子らしい。昭和時代のものだろうか。それにしても昭和も遠くなったなあ。ナ行変格活用の「死ぬる」「往ぬる」は、山口県の方言にも今も残っている。

死ぬる思いをした／死ぬる方がまだましじゃ

このままじゃーいなれん／はー、わしゃーいぬる／いのーや

接尾語の「ちゃん」や文末詞の「や」についても、全国共通語の「さん」や「ましょう」に美しく言い換えて使いましょう、という先生の期待が表されている。『方言学講座』（東京堂 一九六一年）には、当時共通語教育が実践されていたことを示すように、「学校における方言と共通語教育」が記述されている。彼女が見たのは、そんな時代に作成された冊子だったかもしれない。

（17）「見え消し」ですか

見せ消ちとは、本文書写のときに、書き違えた字句を消さずに修正するやり方、補入と並んで多用された訂正法である。現代のように消しゴムで消すのではない。古くは平城宮出土の木簡にも例があり、国語学国文学の演習などの授業ではごく日常的に使われる術語である。ひとたび誤用されるとそれが一人歩きして修正がきかない、というのはよくあることである。見え消しはそういった誤用例。

数年前、連絡メールに或る会議資料が添付されていた、開けてビックリ玉手箱だった。何と「見え消し版」と銘打っている。見え消し版に出くわしたのはそれが二度目。顔を出していた委員会で「見え消し版を…」と聞いたのが最初である。その時は聞き違えたかと思ったが、そうではなかった。インターネットで検索すると見え消し版、見消し修正版などがあふれていた。左はその一部である。官公庁の文書類がずらっと並ぶ。平成13年度作成のものもあった。

平成14年度予算の編成等に関する建議（案）（見消し修正版）

自己評価実施要項（案）（見え消し版）

平成16年度重点施策推進プログラム（案）（見え消し版）

見せ消ちについては、小林芳規氏他の『神田本白氏文集の研究研究篇』（勉誠社 一九八二年）に詳しい。見せ消ちという術語自体は鎌倉時代の高山寺蔵『諸法』に出てくる。

ともあれ、見え消しには仰天した。お役人？がまず「見消ち」という字面を見る。「見」は「見える」だなと思いこむ。正しくは「見す」なのに、そこが間違いのはじまり。連用形語尾の「え」を送りがなに入れよう。「消ち」なんて聞かないな、「消す」だ、消すの連用形語尾の「し」を送らなくちゃ。こうして賢しらから見え消し版が出来上がる。

『日本国語大辞典 第二版』は「消つ」の語誌を要旨次のように説いている。

平安時代の和歌・和文には「けつ」を用いて「けす」を用いない、平安初期の訓点資料では「けつ」「けす」の両形を用い、平安

時代後半期の訓点資料では「けす」はあるが「けつ」は用いない。鎌倉時代以降は徐々に「けす」に統一されていく。「見せ消ち」という語は古形の複合保存例である。現在は使わない四段動詞「消つ」が残されている。

富士の嶺のならぬおもひに燃えばもえ神だに消たぬ空しけぶりを

（古今和歌集　雑体・一〇二八）

(18) 寝て子を起こしたり…

「寝て子を起こす」は、人文学部の名誉教授、水本精一郎先生に教わった。「寝た子を起こす」ではない。国語学国文学研究室では以前、卒論の提出後、日を置かずに追い出しコンパがあった。無事提出できた安堵感・解放感から、四年生の挨拶は反省の弁一色で、大抵みな「締切り間近にジタバタせぬよう、早めに取りかかってください。」で締めくくった。堪らなくなり先生が一言おっしゃる。

寝て子を起こすちゅうんや、それは！

自分は出来ないのに他人に向けては努力を求める。寝て子を起こす例は結構多い。自分は「疲れた、疲れた」と布団に飛び込みながら、ねじり鉢巻きの我が子に「受験がんばれよ！」とハッパをかける。夏休みの早朝六時すぎ、「ラジオ体操始まるよ、起きて早く行きなさい。」と追い立てる。自分は布団の中、担任の先生だってその時間帯は白河夜船だったり。政治の世界でもまた同じ。核大国は、自国の核には口をつぐみながら、これから核兵器開発をめざす国には「核拡散はよくない」と圧力をかける。

むすびにかえて

○　先生が「質問する側にばかり回らないで！」と学生に注文する意味がわかりました。質問に対する答えを見つける「方法」を学ぶのが大学の勉強なのですね。日常生活で疑問に思ったことをそのままにせぬよう、発見の目を持つようにします。

（人文・Ｉさん）

冷静に日本語や自分の内面を見つめる学生もいて、教員の私もまた教えられる。そうしてすごした歳月、感謝の気持ちでいっぱいである。本論文に、研究者としての横顔・思いも見て下されば幸いである。

本稿を成すにあたり、窪薗晴夫、真田信治、山口大学の太田聡各氏の著作から、また、阿部泰記、加藤崇雄、豊澤一、根ヶ山徹、橋本義則、平山豊の諸氏からも色々教えられることが多かった。ここに記してお礼を申し上げる。

（用例引用文献）

新編日本古典文学全集『太平記』（小学館　一九九四年）
新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』（小学館　二〇〇三年）
田山方南校閲北野克写『名語記』（勉誠社　一九八三年）
新編日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』（小学館　一九九五年）
新日本古典文学大系『浮世風呂他』（岩波書店　一九八九年）
松村明編『日本文法大辞典』（明治書院　一九七一年）

近代日本文学大系『近松門左衛門集 上』（国民図書株式会社　一九二七年）
土井忠生他『邦訳 日葡辞書』（岩波書店　一九八〇年）
『サンデー毎日』二〇〇六年八月二〇日－二七日号（毎日新聞社）
新編日本古典文学全集『近松門左衛門集 1』（小学館　一九九七年）
『日本国語大辞典 第二版』（小学館　二〇〇一年）
岩波文庫『毛吹草』（岩波書店　二〇〇〇年）
古典俳文学大系『貞門俳諧集 一』（集英社　一九七〇年）
川崎洋『日本の遊び歌』（新潮社　一九九四年）
佐竹昭広他『萬葉集 本文篇』（塙書房　一九九九年）
馬渕和夫『和名類聚抄 古写本声点本 本文および索引』（風間書房　一九七三年）
天理図書館善本叢書『類聚名義抄 観智院本』（八木書店　一九七六年）
『藤村全集 第十二巻』（筑摩書房　一九七四年）
日本思想大系『道元 上』（岩波書店　一九七〇年）
『晉書』（中華書局出版　一九八二年）
文部省『小学國語讀本』（大阪書籍株式会社　一九三二年）
伊藤博『万葉集釋注』（集英社　二〇〇〇年）
『日本民俗大辞典』（吉川弘文館　二〇〇〇年）
佐藤亮一監修『お国ことばを知る 方言の地図帳』（小学館　二〇〇二年）
朝倉治彦・柏川修一校訂編集『守貞謾稿』（東京堂出版　一九九二年）
新編日本古典文学全集『古事記』（小学館　一九九七年）
日本古典全集『重訂本本草綱目啓蒙 第二』（現代思潮社　一九七八年）
『日本書紀私記』（古典保存会　一九三三年）
新編日本古典文学全集『竹取物語他』（小学館　二〇〇四年）
新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店　一九八九年）

（そえだ・けんじろう）